

# 【ねがいましては】

令和7年6月15日

KYOWA SCHOOL

第411号

## 「失敗楽しむ脳」

—最近の子どもは失敗することに強い恐怖を感じているとよく聞く——と、始まる記事が新聞にありました。

量子科学技術研究開発機構の山田さんたちの研究では、失敗を過度に恐れる人の脳では、不安や抑うつに関わる前頭葉の脳機能ネットワークの働きが弱いことなどを明らかにしてきたそうです。つまり前頭葉の働きが悪くなると、失敗への恐怖心がより大きくなりやすくなるというわけです。

じゃ一良くすればいいのだ！となります。かなり前のことなのですが、東北大学の川島隆太教授が書かれた本の中に血流量の変化画像があることを思い出しました。1. 動画視聴 2. 黙読 3. 音読 の3つの中で最も血流量が大きいのが「音読」です。さらに大学生に頼み、難解な英文書を音読してもらったところ、これが最も血流量が大きかった。声を出しながら脳に負荷がかかった状態・・・これがチャンピオン。

新聞記事に戻ります。山田さんたちの研究では、「失敗や逆境がある時こそ、成功した時に、より強い幸福感が生まれると考えている」とのコメント。つまり、何度も何度も失敗を重ね、たった1問の文章問題を数時間、いや数日かけてやっとのこと解いた瞬間にこそ、最強の幸福感を感じることができるというわけです。

そうなると気になることも書いてありました。今後、さらにAIなどの発達によって、今からチャレンジすることに対し、AIからアドバイスを簡単に入手できるようになってしまふと・・・そなんです。なんと失敗量が減るわけであり、これは取り組む当事者の脳の血流量を大幅に減らすことにつながり、ついには「強い恐怖心を感じやすい人間」になってしまう恐れがあるということです。

そこで私の脳裏に浮かんだのは、学校現場すべての子どもたちに配られているタブレットです。それを活用することで、より理解を深めましょうという目的なのでしょうが、図書室や図書館、または街の書店へ家族と出向き、長時間「どの参考書がいいかなー」と、親子時間を楽しむなんてことも少なくなってしまったようです。便利は逆に何かを奪い取る・・・。

私は家族間のコミュニケーションは重要だと思っています。意思の疎通に必要な「ことば」は、やがて新入学時からは文字に置き換えられ「学習」へと変化していきます。言葉を楽しむ、文字を楽しむ・・・これは「学習」にとっての根幹部分です。そして好奇心に満ち溢れた子どもたちのこころは何事にも屈しないチャレンジ精神で覆われることが理想です。何度失敗してもそれが当たり前。「だってそうお母さんに教わったもん」「失敗することからスタートだって」「失敗の数が多いほどうまくいったときのうれしさが大きいんだって、ぼくそれをめざしてる」

本物の失敗とは何ぞや・・・『真剣に立ち向かってダメだった時』のことです。

今回とりあげた新聞記事の題目がとても素敵です。『失敗楽しむ脳』で生きる実感』です。

一米医療機器メーカー日本法人の社長を長年務めた経験を持ち、現在は日米の医療機器ベンチャー3社に助言している王惠民さん(67)によると、米国の起業家は三つ、四つの起業の失敗経験を勲章のように誇り、次の挑戦に目を輝かせるという。王さんは「失敗するのは当たり前。逆に失敗しないと成功はない」と言い切る。—

子どもたちが常にこのような気持ちで、学校生活を送ることができたらいいなと感じました。テストがあるたびに「どうしよう」。授業のたびに「先生に指されたらどうしよう」。テストが返却され、それを持ち帰り母親に見せた瞬間の一言を創造すると「あー、やだなー」。そんな気持で日々を過ごす子はどのくらいいるのでしょうか。

お子さんの初めての学校登校前日、「いいですか、学校っていうところはね、たくさんたくさん失敗を楽しむところなのよ。だから、思いきり精一杯がんばって失敗するのよ。そして何回も何回も失敗したあとでひょっとするとうまくいく時があるの。その時のうれしい気持ちを学ぶ場所なのよ。」

精一杯にチャレンジしてそれでだめだった。その時こそお母さんが主役になる瞬間です。精一杯だったことを思いきり褒めちぎってあげることです。とくに学校入りたての時期には思いきり「ハグ！」・・・その繰り返しではないでしょうか。

何かをしようとするとき、「どうせうまくいかないから」と、あきらめムードでスタートする子は結構いるはずです。まずは見本を見せなくてはなりません。そこで登場するのがお母さん、お父さんです。家族が失敗を楽しんでいる場面はお子さんにとってはこの上ないお手本になるはずです。失敗した瞬間、その瞬間の表情のお手本をお子さんに見せる。

「イヤー、楽しそうだなー。そうか、失敗って悪いことじゃないんだ。だから精一杯の『0点』だって、悪くはないぞ。それよりなんでバツだったんだろうって、いつもお母さん真剣に僕のバツのところを考えてるなー。きっとそれが大切なんだ。ぼくもいつしょになって考えよう・・・。」

どうでしょうか。お子さんたちはほとんどが「バツは悪い」と思い込んでいます。それもそのはず、誰かさんの表情がバツを『悪魔』に変えています。

バツ（失敗）を『天使』に変えることのできる魔法使いは、やっぱりお母さんしかいないようです。